

大学レベルにおける基本的なコミュニケーション能力育成 —大学初年度教育としての日本語運用能力育成プログラム—

● 村 越 行 雄

1. はじめに

大学初年度教育の問題は、その広がりや深刻さの点で、避けて通れない、緊急に何らかの解決策を見出さなければならない程になっている。その解決策への試みは、現在各大学で実行されており、各大学の状況に合わせて、それぞれが独自の方法で進められている。今回は、跡見学園女子大学で実施されている1年生春学期必修科目の「プロゼミⅠ」について、実態分析・報告をすることで、初年度教育の問題への一つの方向性を探ることにしたい。なお、全員必修の科目であるが、基本的な理念や目標・目的は全クラス共通になっているが、各クラスは担当教員の独自性によって実施されている。従って、実態分析・報告の対象になっているのは、私自身が担当したクラスに関するものであって、他のクラスが同様であることではないことを最初に断っておく必要がある。

2. 現状認識

高校生が大学に入学し、新入生としてスタートする時、様々なギャップが存在し、時には乗り越えられず、遅刻・欠席・不登校・休学・退学という最悪な事態に陥る学生もいれば、表面的には出席しているが、クラスにおける理解不足から心理的な不適合まで、さらにはカウンセラーによる治療、最終的には病院での受診へと悪化する学生もいる。そこには、表面化する部分だけでなく、隠れた部分も多くあり、現状認識の難しさを生み出し、問題の正確な把握を不可能にさせているのである。勿論、大学に関連する問題以外にも、学生各人が抱えている個人的な問題もあるが、ここでは立ち入らないことにする。

高校と大学の間に存在するギャップについて、よく取り上げられるのが教育システムの相違である。一例を挙げれば、大学では、単位制で卒業要件を充足するように自ら計画的に科目を登録し、必要単位を履修し、卒業まで自己責任で行っていくことになるが、高校では、文部科学省の方針に従って、学校で指

定された科目を履修していくことになる。それとの関係で、能動的な大学生と受動的な高校生、自己選択・自己決定・自己責任の大学生と自己選択・自己決定の余地がなく、それだけに自己責任も余りない高校生、出席を余り気にしない大学生と出席を最重要役割と見なす高校生、週に数回しか学校に行かない大学生と毎日学校に行く高校生、専門教育を受け、研究をする大学生と一般的知識を習い、勉強する高校生、その他にも数え切れない程のイメージを抱かれているのが現状である。そのような比較は、対照というよりは対比というようなものになってしまっている。それだけギャップの大きさを表しているのであろう。

ともかく、幼稚園・小学校・中学校・高校と大学・大学院の間には、それ以外の間（例えば、中学校と高校の間のように）にはない程のギャップ、量的にも大きく、質的にも深い、乗り越えられない程のギャップが存在しているかのような印象を受けてしまう。もし日本の学校教育制度の中に、そのような量的にも、質的にも、相異なる異質的な部分が並存し、2部構成の構造を認めるのであれば、当然それなりの適切な対応策をすべきであろう。そして、もし日本の学校教育制度をそのようなものとして認めるのであれば、大学初年度教育の問題は、大学側が何としても解決しなければならない任務であり、義務であり、また同様に、文部科学省の任務・義務であろう。

3. 大学側の対応策

新入生全員がギャップを乗り越え、同じスタートラインに立つことができるようにさせる為には、何らかの対応策が必要になる。以前であれば、学生本人の努力で自ら対応し、解決できる能力を持っていたこともあり、大学側が特別な対応策を実施する必要性はなかった。しかし、現在では、高校側にも、学生側にも、たとえそれが何であれ、対応策を要求するのは困難であり、従って大学側で実施するしかないと言えよう。ただ、残念なことに、問題を学生の自己責任にしたり、高校の教育に責任を負わせたりして、何らの積極的な対応策を実施していない大学があることも事実である。勿論、大学が全ての責任を負うべきであると言っているわけではなく、高校と学生にはそれなりの役割分担があるが、やはり中核になるのは大学であり、何を、どのように、どこまでできるのかを明確にし、実行していかなければならない。

大学側が実施できる対応策の1つに、コミュニケーション能力の育成がある。

特に、日本語によるコミュニケーション能力に関してである。大学レベルで考えると、勿論学生が専攻する専門分野の基礎知識は重要であるが、それ以前に日本語コミュニケーション能力の問題が大きな壁になっていることも事実である。ここでは、コミュニケーションに関する基礎的な能力（全ての人間関係にとって必要不可欠な能力）や一般的な能力（社会生活にとって必要不可欠な能力）ではなく、あくまでも大学4年間の研究活動を無事に終えるための能力のことを対象にしている。ただし、基礎的能力と一般的な能力を土台にして初めて大学レベルの能力の育成も可能になるのであるが、果たして大学側がその土台の部分までもカリキュラムの一環として取り入れるべきかは、考える必要があらう。つまり、大学への入学許可の範囲をどこまで広げるのかという問題が関わってくるからである。

4. 実態分析の内容

新入生全員が入学直後に受講するプロゼミⅠは、話す・聞く・読む・書くの4技能に関して、大学で求められる基本的な知識と技術を身につけさせることが目的で、しかも他の科目との有機的な関係のもとで、総合的に日本語コミュニケーション能力を育成することが目標である。例えば、文学部コミュニケーション文化学科では、日本語関係だけでも、1年生ではプロゼミⅠとプロゼミⅡ、日本語コミュニケーションスキルⅠ(会話)、2年生では日本語コミュニケーション論Ⅰ(音声)、日本語ディベート演習、3年生では日本語コミュニケーション論Ⅱ(文章)、日本語コミュニケーションスキルⅡ(文章)を受講することになっている。これらの科目の有機的な関係の中で、大学レベルの日本語コミュニケーション能力の育成が実行されている。

プロゼミⅠは、以上の中で位置づけられ、1年生の春学期という高校卒業後、大学に来て初めて受講する科目で、高校と大学の間のギャップを実体験する場であり、それだけに責任も大きいものになっている。そこで、具体的な授業内容を説明していくことにする。

平成21年度入学の受講生32名の演習「プロゼミⅠ」が実態分析の対象である。平成21年春学期においては、大学における研究の意味と役割、表現方法、情報収集の方法(図書館利用の実地訓練などを含む)などを講義し、発表の実践訓練に使用したのは8回の授業である。発表は、1回の授業で12名が5分間の制限時間で行い、8回の授業で合計96回の予定で行われ、従って学生1人あたり、

3回の発表となるが、実際には欠席あるいは準備不足の為に発表できず、1回のみ、2回のみ、4回の学生が出てきて、多少のばらつきがあった。

発表に関する手順は、次のようにした。学生全員が自分で発表テーマについて考え、選び、それに関する資料を探し、資料を整理し、5分間で発表できるようにレジュメを作成し、その上で授業に参加する。授業では、事前に伝えず、その場で1人1人教員が指名し、5分間の発表をする。発表する学生以外は全員判定用紙に記入する。判定用紙は、12名の発表者1人1人に対して、発表タイトルと発表者氏名を書き、総合評価（5点満点）と個別評価（構成・展開、証明・根拠、テーマの理解・把握、正当・妥当、表現力の5つの基準各5点満点）と自由記述のコメント・評価の3部構成からなる判定を記入するものである。発表後、翌週までに発表したテーマについてレポート（発表したレジュメを発展させる）を作成し、提出する。以上の手順を各学生は3回繰り返すことになる。ここで重要なことは、繰り返し訓練することであり、単に発表するだけではなく（これでは3回だけになってしまう）、他の学生の発表を聞き、しかも毎回12名の発表を聞き、的確に判定することによって自分の発表に生かせることである。ただ聞くだけでは、漠然と聞くことになり、効果は余りなく、厳密に判定することで、聞くことの意義を理解し、次の発表に生かせることになるからである。

より効果的にする為、以下のことを考えて、実行した。

（1）最終成績評価は、一方的に教員が決定するのではなく、教員と学生の評価点の合計で決め、学生の積極的な関わりを促す。成績の妥当性と透明性の確保も同時に行う。

（2）発表するテーマについては、全く制限を付けずに、学生が自分で自由に探し、選択するようにさせることで、興味対象の範囲を拡大させ、また深く掘り下げられるようにする。これは、教員側の決めたテーマを発表させる形式が失敗に終わった過去の経験によるものである。

（3）発表者は、当日授業中に1回に1人ずつアトラダムに選んで、指名することで、全員参加を実現させる。事前に指名すると、それ以外の学生が準備をしなくなり、また当日12名全員を最初に指名してしまうと、残りの学生の関わりが消極的になってしまうことが想定される。

（4）判定用紙について、総合評価と個別評価を区別することで、個々の基準による評価とは別に、全体としてのアピール力と説得力を理解させ、個別とは

時に異なる（時には相反する）全体という総合的なイメージを実体験させる。個別と全体の関係は、決して単なる複数の個別のプラスの合計ではなく、それ以上でも、それ以下でも、それとは全く異なることもあり、全体の捉え方を体験によって理解させる。

（５）個別評価について、何を基準にするかは、多くあると思われるが、余り多くても、また少なくとも、判定しにくくさせる為、一応５つに絞って、基準を決めていくことにする。構成・展開は、発表する内容をどのように構成し、どのように展開するかを論理的に組み立てるの必要があり、従って論理性が問われるものである。証明・根拠は、頭の中にある個人的なものを口から発話して、言語化し、客観的なものにするには、それなりの証明が求められ、根拠が要求されるのであり、従って検証性が問われるものである。テーマの理解・把握は、自分で探し、選択したテーマを表面的な理解（あるいは誤解、偏見も）ではなく、どこまで核心あるいは本質に近づいているかを明らかにすることが求められるのであり、そのために必要な情報の収集力・整理力・分析力が問われるものである。正当・妥当は、発表で示される主張について、その正当性・妥当性を示すことが要求されるのであり、従って独りよがりではない客観性が問われるものである。表現力は、発表する内容ではなく、発表の仕方に関わるもので、言語的メッセージだけでなく、非言語的メッセージも含めて、両者の有機的な関係の中で、総合的なコミュニケーション能力が問われるものである。なお、内容ではなく、形式に関係することで、言語的メッセージでは、同一内容を様々な言語表現で表すことが可能であり、非言語的メッセージでは、顔の表情、視線、声の調子、身体各部分の動き、その他のもの全てを総動員することが可能である。

（６）単にレジュメ作成で終わるのではなく、レポート作成を求めることで、考えをまとめて、整理し、的確な表現で書くことの訓練をさせる。作成したレジュメに基づいて実際に発表した後、教員と学生からの反応を受けて、それらに対応する形で、思考力と文章力を発展させることが可能となる。

（７）自由記述のコメント・評価については、時間的には非常に短時間で書くことになり、必然的に簡潔な文章を書かざるを得なくなり、それが良い訓練になる。短時間というのは、発表の間の数分と全員終了後の数分だけになるからである。

（８）今回は、時間の関係で、１人３回の発表となるが、数多く繰り返すこと

が訓練にとって重要である。そこで、それを補う意味でも、96回の発表予定の内、自分の分を除いた93回の他の学生の発表を聞き、しかも総合評価・個別評価・コメント評価という3部構成で厳格に判定することで、発表の技術の向上に非常に役立つことになる。

5. 実態分析の結果

8回の授業で96回発表の予定が92回で終了した。そして、準備不足の学生がおり、指名した学生が辞退したりして、また欠席が重なり、結局1回あるいは2回で終了した学生が6名になり、逆に4回になった学生が3名出るなどした。多少の誤差は出たが、全般的には1人3回発表し、前述の手順を踏まえた発表ができたと評価できる。ここで、少し具体的に評価をしていくことにする。

発表のテーマについてであるが、学生が自分で自由に探し、選択したのは、以下のものである。第1回から第8回までの発表されたテーマの題名と発表順序、さらに括弧内は学生の総合評価（5点満点）の平均値である。

◎発表のテーマと総合評価：

第1回（5月8日）

- （1）老人ホームの問題点（4.6）
- （2）絶滅危惧種のイリオモテヤマネコについて（3.9）
- （3）欧米諸国と日本の若者の危機（4.2）
- （4）中国の軍事力が与える日本への影響（4.2）
- （5）裁判員制度について（3.7）
- （6）エコポイントについて（4.4）
- （7）温暖化に対する日本の政府の動き（4.7）
- （8）地球温暖化について（3.9）
- （9）子供の貧困について（3.5）
- （10）少子化問題について（4.2）
- （11）うつ病（4.6）
- （12）豚インフルエンザ（4.2）

第2回（5月15日）

- （1）マイバッグ運動とマイハシ運動について（4.5）

- (2) ワークシェアリング (4,2)
- (3) 新型インフルエンザについて (3,9)
- (4) 大気汚染について (3,8)
- (5) 年金の未納問題について (4,3)
- (6) 経済不況の農業について (3,7)
- (7) ヨガについて (4,1)
- (8) 世界一クールな日本企業 (4,0)
- (9) 現代における中食の増加 (4,1)
- (10) 携帯電話の普及について (4,3)
- (11) 定額給付金の経済効果について (4,2)
- (12) 自転車道と歩行者道について (4,1)

第3回 (5月22日)

- (1) 現代の企業と社員 (3,4)
- (2) 定額給付金について (4,0)
- (3) 少子化問題について (4,1)
- (4) バイオ燃料 (4,3)
- (5) 少子化の進行とその原因 (3,9)
- (6) インフルエンザと風邪の違い (4,7)
- (7) 狂犬病の知られていない危険 (4,4)
- (8) CO₂削減について (4,5)
- (9) 日本の文化が世界に与える影響 (3,9)
- (10) 海賊について (4,1)
- (11) 派遣切りについて (4,3)
- (12) ユニセフ募金について (3,9)

第4回 (5月29日)

- (1) 世界遺産 (4,4)
- (2) 老人福祉事業者の倒産 (3,8)
- (3) 食料輸入に頼る日本の危機 (3,6)
- (4) 北朝鮮の核実験について (3,9)
- (5) 孤独死について (4,1)

- (6) 男性介護士について (4,3)
- (7) メタボ検診の義務化について (4,1)
- (8) 薬物依存症について (4,1)
- (9) 現代の肥満問題について (4,5)
- (10) 裁判員制度について (4,1)
- (11) 識字率について (4,2)
- (12) 2016年東京オリンピックについて (3,9)

第5回 (6月5日)

- (1) プチ鬱について (3,8)
- (2) 大学と携帯電話の新たな関係性 (4,0)
- (3) タスポについて (4,3)
- (4) 薬物乱用について (4,2)
- (5) タスポについて (3,8)
- (6) ミツバチ減少による死活問題について (4,2)
- (7) 黒点数の変動は何をもたらすか (4,0)
- (8) 赤ちゃんポストについて (4,1)
- (9) 現代日本社会における自殺 (3,9)
- (10) 輸入業務について (3,7)
- (11) NGO について (3,9)
- (12) コンビニエンスストアについて (3,7)

第6回 (6月19日)

- (1) サッカーワールドカップについて (4,4)
- (2) ゲリラ豪雨について (4,0)
- (3) 脳死について (4,2)
- (4) 放置自転車 (4,1)
- (5) いじめについて (4,2)
- (6) 関東と関西の違いについて (4,3)
- (7) 婚活について (4,1)
- (8) 臓器移植について (4,3)
- (9) モンスターペアレントについて (4,4)

- (10) DNA 鑑定について (4.0)
- (11) 小児医療について (4.1)
- (12) 職を失う非正規労働者の実態 (3.9)

第7回 (7月10日)

- (1) サイバー攻撃について (4.0)
- (2) 北朝鮮について (4.2)
- (3) HIV・エイズについて (4.2)
- (4) 嗅覚と脳について (4.5)
- (5) 学校裏サイト問題について (4.3)
- (6) 世界の飢餓問題について (4.3)
- (7) 男子と女子の境界線について (4.1)
- (8) ナルコレプシーについて (4.3)
- (9) 母子加算廃止 (4.3)
- (10) 衰退した日本経済を救う市場 (3.9)
- (11) 医師不足問題について (4.1)
- (12) 学童保育について (4.2)

第8回 (7月17日)

- (1) 婚活について (4.2)
- (2) 日食について (3.7)
- (3) 自殺と経済の影響 (4.0)
- (4) 改正薬事法 (4.1)
- (5) 成長と本の関わり方について (4.2)
- (6) ひめゆりの塔について (3.8)
- (7) エコカーについて (4.0)
- (8) ホームレスについて (4.0)

92の発表テーマから言えることは、テレビ、新聞、その他のメディアを通して話題になったテーマを取り上げていることである。これは、いい意味での驚きである。全く自由に、何の制限も付けずに、興味のあるテーマを選択するように指示しただけで、もう少し個人的で、私的なテーマが選択されると予想し

ていたからである。結果は、マスコミで話題になったテーマが選択され、社会性が十分に示されたと思われる。それに、ある特定の時代に注目された話題に対する興味であり、時代性を示していると言えるし、社会の多くの人に関わる公共性も示していると言える。大学入学直後の春学期の授業で、これほどの社会性・時代性・公共性を示すことができたことは高く評価できるし、大学レベルでの興味の対象領域としては十分である。

発表に対する評価は、学生側の総合評価としては、3.4～4.7の範囲内である。ここで、別の資料を示すことにする。以下は、受講生32名全員の発表回数、各発表の総合評価（5点満点）、総合評価の合計についての教員側の得点と学生側の得点である。

◎判定結果（左が教員の得点、右が学生の得点）

- 1 (3+5+5=)13-(3.7+4.2+4.3=)12.5
- 2 (4+4=)8-(3.4+4.0=)7.4
- 3 (5+5+5=)15-(4.3+4.2+4.0=)12.5
- 4 (4+4+5=)13-(4.2+3.9+4.2=)12.3
- 5 (4+5=)9-(4.0+4.1=)8.1
- 6 (5+5+5=)15-(4.5+4.2+4.3=)13
- 7 (5+5+4=)14-(4.7+4.4+4.3=)13.4
- 8 (4+4+5=)13-(3.5+3.6+3.9=)11
- 9 (5+4+4=)13-(4.0+4.0+4.0=)12
- 10 (4+5+4=)13-(3.9+4.3+4.2=)12.4
- 11 (5+5+5=)15-(4.3+4.1+4.4=)12.7
- 12 (4+4=)8-(3.7+3.8=)7.5
- 13 (4+4+5=)13-(4.2+3.9+4.0=)12.1
- 14 (5+4+5=)14-(4.1+3.7+4.1=)11.9
- 15 (4+4+5=)13-(4.4+4.1+4.3=)12.8
- 16 (5+4+5=)14-(4.3+3.7+4.1=)12.1
- 17 (4+5+4=)13-(4.2+4.0+4.2=)12.4
- 18 (5+3+4=)12-(4.2+3.9+3.9=)12
- 19 (4+4+5=)13-(4.1+3.8+4.2=)12.1
- 20 (4+4+4=)12-(3.9+4.1+4.1=)12.1

- 21 $(4 + 3 + 4 =) 11 - (3.8 + 3.9 + 3.8 =) 11.5$
- 22 $(4 + 4 + 4 =) 12 - (3.9 + 4.3 + 4.1 =) 12.3$
- 23 $(3 + 4 + 4 =) 11 - (4.6 + 4.1 + 4.5 =) 13.2$
- 24 $(4 + 5 + 4 =) 13 - (4.2 + 4.4 + 4.0 =) 12.6$
- 25 $(4 =) 4 - (4.2 =) 4.2$
- 26 $(4 + 4 + 5 =) 13 - (4.1 + 3.9 + 3.7 =) 11.7$
- 27 $(5 + 5 + 4 + 4 =) 18 - (4.1 + 3.9 + 4.5 + 4.3 =) 16.8$
- 28 $(4 + 5 + 4 + 5 =) 18 - (3.9 + 4.1 + 4.2 + 4.0 =) 16.2$
- 29 $(4 + 4 + 5 =) 13 - (4.7 + 3.8 + 4.2 =) 12.7$
- 30 $(5 + 4 =) 9 - (4.4 + 4.1 =) 8.5$
- 31 $(4 + 4 =) 8 - (4.5 + 4.2 =) 8.7$
- 32 $(5 + 4 + 5 + 5 =) 19 - (4.6 + 4.2 + 4.1 + 4.4 =) 17.3$

総合評価の得点について、教員側は3～5の範囲内で、学生側は3.4～4.7の範囲内であり、学生側の評価が特に甘いというわけではなく、むしろ教員側よりも厳しいとも言える。どちらが甘いか、厳しいかはともかくとして、両者の比較から言えることは、学生側の評価には客観性・妥当性・信頼性があるということである。もしそうであるとすると、学生の発表自体が能力的にかなり高い水準にあること、そして学生の判定能力もかなり高い水準にあるということになる。これらの発表能力と判定能力が、平均的な3より高く、4から5へとレベル的に高水準にあると言えよう。自分の発表と他人の発表の判定の間には、相互依存的で、相乗効果があり、極めて良い結果であったと判断できる。

個別評価の5基準について、学生側の評価は1～5の範囲で広くばらつきがあるが、1と2を付けることはごく少なく例外的で、ほとんどが3～5の範囲内にある。その意味では、構成・展開・証明・根拠、テーマの理解・把握、正当・妥当、表現力の5基準全てで高い水準を示していると言える。その他に、別の評価すべきことがある。第1回目は、総合評価だけで判定させたが、具体的な判定基準がわからず、判定困難であるという学生側からの意見を取り入れて、第2回目以降は前述の意味で5つの基準を設定し、その基準で判定させた。結果として、学生側の判定がしやすくなったと言えるし、そのことで学生側の個別評価についても、客観性・妥当性・信頼性が示されることになったと言える。

ただし、自由記述のコメント・評価については、時間的に余裕が余りなく、記述が非常に簡単で、必ずしも得たものとも言えない。今後の改善の必要性があると思われる。しかし、記述時間を長くすることで、発表回数が減らされることになり、別の問題を生むことになる。ともかく、単純に解決できる問題ではないであろう。

レポートについては、全般的にはすばらしい出来映えであると言える。それは、ただ単にいきなりレポートを作成するのではなく、発表用のレジュメを作成し、そして実際に発表をし、教員と学生からの反応を知り、その上で書き上げたレジュメを修正・発展させたわけで、このようなプロセスを経て書き上げられたレポートが高い水準を示すのは当然のことであると言えるからである。むしろ、学生がこのようなプロセスを経て書かれるレポートの質の高さを十分理解し、その技術の獲得を可能にしてほしいと思う。

6. 評価

32名の受講生と8回の授業という限られた条件下で実施された訓練は、十分な成果を得ることができたと思われる。事実、学生の発表、判定、レジュメ・レポート作成などを通して示された話す・聞く・読む・書くの4技能の水準は極めて高いものであった。従って、大学レベルの日本語運用能力は基本的には達成されたと言えるであろう。ただし、基本的なコミュニケーション能力育成は繰り返し行われることが絶対的に必要であり、しかも単なる繰り返しよりは、少しでもレベルアップした形での繰り返しが必要である。その意味では、今回の訓練が継続的に形を変えて実施されていくことが求められるし、さらに大学での専門的な研究に必要な能力を積み上げていく為の何らかの訓練が求められる。そして、様々な訓練が有機的な関係の下で組み立てられ、より効果的なシステム化が強く求められる。